

第2回 伊勢崎市部活動地域移行検討委員会 議事録

期 日 令和7年1月31日（金）15:00～16:30

会 場 市役所北館4階会議室

出席者 菅谷美沙都委員、武井義夫委員、平林知巳委員、堀田享委員、山田千広委員、
宮崎孝宏委員、塚原正徳委員、結城啓之委員、吉田啓祐委員

欠 席 狩野浩之委員

1 開会

2 あいさつ （三好教育長）

- ・本市の取り組みとして、子どもの数、教員の数等、今ある部活動の中で子どもたちがやりたいことができる環境を整えていくことをまずは考えている。
- ・指導員の確保、そして身分保障などを進める。もちろん、目指す姿、理想的なものがあるものの、まずは現実的に進めていきたい。
- ・私の立場からは、やはり働き方改革。教員の多忙感の解消を考えたい。現在の勤務状況を見ると、部活指導が負担となっているのは明らか。教員がその本分である授業にしっかり取り組めるよう、部活動地域移行を進めていきたい。
- ・本日も、この部活動地域移行検討委員会で様々なご意見を頂きたい。

3 報告

（事務局）

- ・地域スポーツ活動体制整備事業を活用したこれまでの取組
- ・部活動地域移行リーフレット
- ・部活動地域移行に係る国の動向について

（委員）

- ・県のコーディネーターとして、地域スポーツクラブの視察で福岡県と長崎県に行ってきた。まず、福岡県は大学と連携し、地域クラブ活動を実施している。協力している福岡大は医学部を含む総合大学で、トップアスリートも多く輩出している大学である。大学の恵まれたスポーツ施設を広く開放し、街全体でウェルビーイングを目指していると感じた。一見、恵まれた環境にあるからと思われるだろうが、今一度、持っている資源を活用しきれているかを見直す必要があると感じた。
- ・長崎県は群馬県と同じような規模だが、離島や半島が多く、移動が困難である。そのような中で、全市町村に協議会を設置し、取り組んでいる。長与町の視察では、指導に当たっている大人がもっとも楽しそうであった。原点に立ち返り、我々も楽しみながらやっていこうと思った。

4 協議

① 次年度の取組の方向性について

(事務局)

- ・本年度、まずは学校間連携を進め、もう一つは、国の地域スポーツクラブ活動体制整備事業の活用を始めた。各校からの報告や話を伺い、これらの活動を継続していきたいとの回答を受けた。次年度も、国の地域スポーツクラブ活動体制整備事業の活用を継続し、国や県と連携していく。そして学校間連携を広げていければと考えている。この方向性でよいのか。

(委員)

- ・来年度、群馬県では国の地域スポーツクラブ活動への移行に向けた実証事業（重点地域における政策課題への対応）を受ける予定である。12の課題の中から3つ選ぶこととなっており、伊勢崎市に当てはめると①多様なスポーツ機会の提供と②高校との連携などが考えられる。例えば、弓道やボクシング、空手など部活動にはないスポーツを実践できるのではないのか。学校から子どもたちへの紹介やスポーツ協会の協力がないとできないが、提案したい。

② 地域クラブに参加している合同部活動における中体連主催大会への参加態様の検討

(事務局)

- ・中体連主催大会への参加について説明する。参加形態には学校単位での参加。次に合同チームによる参加がある。これは野球やバスケットボールなど団体種目のみが対象で、いずれかの学校の部が各種目の競技人数を下回ることが条件である。新人大会で参加が認められた場合、次年度の総合体育大会まで同じ組み合わせで参加可能というルールに、令和6年度から変更となっている。次に拠点校部活動による大会参加がある。すべての種目で設置が認められており、人数制限もない。しかし、いずれかの学校で部をなくす必要があり、その点で設置のハードルが高い。
- ・学校から問題として挙げられたことが、合同部活動として継続して活動したいが、1年生が入部し、新人大会から人数がそろうことで合同部活動を解消しなければならない場合があるということである。そこで、地域クラブによる大会参加を紹介している。クラブとして登録すれば、人数が増えても参加が可能。さらに進めれば地域クラブへと展開していくことができると思われる。問題点は、大会への参加が県大会からになってしまう種目があり、課題となっている。これは県中体連が決めたルールであり、かなり流動的であると考ええる。地域クラブとして中体連の大会に出ることも一つの選択肢として考えられる。

(委員)

- ・地域クラブの定義は、今説明があったような定義だけなのか。例えば、2つの中学校が合わさったクラブに、別の学校の1人が入りたいということはできるのか。自分の学校に部活があるのに強いからとか、集まってやろうとか、色々な問題が考えられるのではないのか。

(事務局)

- ・伊勢崎市は、地域を単位とし、何でもありにはしない。

(委員)

- ・バスケットボールでは、地域移行の受け皿となる行政が設置したクラブ以外は認めていない。他競技では今のところ明記はされていないが、今後増えてくれば変わっていくだろう。中体連では、4月にクラブで登録すると、中学校では出られない。クラブでの大会参加を整えれば、やりたくてもできない子を救えると思う。

(委員)

- ・長与町は、地域の3校以外は入れない。他の自治体にも地域クラブをつくってもらいたいという考えからのようだ。

(委員)

- ・今のところ、中体連の大会に、伊勢崎市が考えている地域でクラブチームをつくって出場するというパターンはない。このパターンができるなら助かる地域はたくさんあるだろう。大会はもちろん、スポーツを愛好していて楽しくやっていきたいという場合も、地域でまとまっていく可能性はあると思う。

(事務局)

- ・地域クラブによる大会参加の案は、バリエーション、発展性のあるものとして、1つのベースとなるのではないかと考えている。国の改革期間の令和13年まであと7年でどのように進めていくか。指導者、持続可能なものにしておくためにはどうすべきかなど、具体的な議題としてこの場に出てくるのではないかな。

(委員)

- ・地域クラブは、種目別として考えていますか。

(事務局)

- ・最初は種目別と考えている。ただ、クラブが増えてきたときにどういう規模がよいのか、地域の様子によって検討したい。

(委員)

- ・1人が多種目に取り組めるのが望ましいとは思いますが、なかなか難しいだろう。

(委員)

- ・県は令和10年までに部活動地域移行を完了したいと言っている。

(委員)

- ・誰もがスポーツに携わるということに対して、これまでやってきたことは間違いなく、達成しつつあると思う。

(委員)

- ・将来はこうありたいというものを逆算してつくっていかないと、なかなか進みづらい。スポーツができればいいというだけでなく、もう一歩考えると、やはり強化をどうするか。これから先のことも考えて進めていく必要がある。

(委員)

- ・本校は現状では合同部活動等に関わっていないが、関わっている学校の様子を見て、簡単ではないと感じる。それでも、先々のことを考えると、本校も市内の全中学校も、どこも部活動の運営が厳しくなっていく。子どもと保護者の立場では、どうしても抵抗感がある中、本日示されたような地域クラブ活動が期待される。例えば、人数がいても、体操競技など特殊な器具や指導が必要なものは別の場所に集まってやるなど。人数がいても、クラブでやるという方向に進んでいくのではないか。

(委員)

- ・本校のサッカー部は、現状すごく部員が少ないというわけではない。それでも本当は境南中や境西中と一緒にやっていきたい。そこで、やはり県大会から参加というのは子どもたちには抵抗がある。ルールを統一してもらえるとよいと思う。

(委員)

- ・話題に上がっているような既存の部活動が地域クラブになっていく場合と、新規のもの、部活にない種目などに中学生が参加する隙間もあるのではないかな。

(委員)

- ・前橋市がそういう形で地域移行を進めている。土日の部活動を休止とし、中学生は、「まえばしスポーツクラブ」に登録した団体が主催する多様な運動活動に参加することができるようにしている。

(委員)

- ・小学生への説明会があり、部活動の紹介などがあると、中学校にある部活動に入らなければというバイアスがかかる。既存の競技をどうしていくかは方向性が見えてきている。既存でないものをどうしていくか、様々な競技を体験できるといった本来の地域移行をどうしていくか。それから、お金をどうしていくか。

(委員)

- ・最近、弓道やゲートボールなどに参加する中学生が増えている。学校がどうかではなく、一人ひとりに「何がやりたい」と思わせるのが我々の仕事だと思う。

(委員)

- ・1つの部活だけと考えるのが難しいところ。二股はダメという文化をどう変えていくかも難しいところである。

(委員)

- ・生涯続いていくので、中学・高校で制限してはいけない。小さいことから色々やってみることで、運動神経は身についていくのだから。

(委員)

- ・あと数年で中体連がなくなる可能性もある。全国大会も縮小されるなど、今まで教員が支えてきたものが変わろうとしている。

(委員)

- ・1人が3競技でもやって、掛け持ちして大会に参加してもよいのではないかな。

(事務局)

- ・伊勢崎市としては、既存の部活動からどうしていくか、まず考えていきたい。多くの競技が行える環境については、高校や各種協会との連携を進めながら、クラブをつくっていくなどが考えられる。

(委員)

- ・近い地域でやっていけるところはよいが、そうでない地区を考えると、親としては離れている心配もある。
- ・これまで部活動ではなかったものをどこまで保証してあげなければならないのか。「ないものはしかたない」ということもある。どこかで線引きは必要だと思う。部活動だけを30年前と同じように維持するのは難しい。PTAなども縮小傾向にある。地域移行で保護者の負担が増えていってしまうのが心配である。

(事務局)

- ・運用できるものは運用していく、地域で単独でできるものは残していくことも必要だろう。

(委員)

- ・先生の中にも、それほど部活動を負担に感じていない人もいる。それでも、地域で関心を持ち、地域で子どもたちを育てていくという考えは大切だと思う。地域の方々がスポーツをもとに集まることも大切。
- ・中体連の大会となれば勝つことを目指していくのはもっともで、総合型地域スポーツクラブのように様々な競技に接することと両輪で進めていくのがよいと思う。地域によっては単独で続けていくのもよいと思う。

(事務局)

- ・まずは休日の地域移行を進めていくところ。継続させるためのクラブ活動という考え。単独でやっていくところも、将来的には地域クラブ化を目指していきたい。

③ 伊勢崎市中学校「部活動支援」「地域クラブ活動支援」人材リストの作成について

(事務局)

- ・県は人材バンクという名称で、伊勢崎市としては、今の議論にもあった地域クラブの将来像を考え、作ったもの。直接かかわる人が本検討委員会にもいるので、よく見てご意見をいただきたい。「やりたい人」といって一律に集めるのではないこと、かかわり方を2つに分けていることが、集め方のポイントとなっている

(委員)

- ・先日の視察で、第四中と第三中の合同部活動の様子を見た際、顧問、部活動指導員、サポートなど、まさに具体的な姿であった。
- ・これまで携わっている方だけでなく、眠っている人材をどう掘り起こすかについてはどういうイメージなのか。

(委員)

- ・スポーツ協会に多くの団体が加盟しており、指導者がいる。ライセンスがない人や、父兄もたくさんいる。投げかければやりたい人は出てくる。推薦してもらい、はっきりと所属してもらったことが大切である。

(委員)

- ・教員でもよいのか。県の人材バンクに登録したが、そちらは教員も大丈夫。

(委員)

- ・先行して行っている山梨大学の例を見ると、中学校が必要とする人材を大学から見つけるマッチングが難しいようである。

(委員)

- ・例えば、学生は参加すると単位が認められるというのはどうか。ボランティア活動のように。検討してもらえれば。

(委員)

- ・研修はどうするのか。

(事務局)

- ・募集やマッチング後の研修と考えている。どこかのタイミングで研修を行うことは必要と考えている。

(委員)

- ・将来的に、地域から何人といったノルマが出ないかが心配である。PTAと同様に。自分から手を挙げるのと推薦するという段階でよく考える必要を感じる。

(委員)

- ・そうならないようにしていけば大丈夫であろう。まずはどのくらい集まってくれるのかを見してみる。人材リストはとてもよい案だと思う。

(事務局)

- ・どれくらい出てくるかわからないので、まずはそれぞれの角度からリストを挙げていただく。マッチングはおそらく難しい作業になると考えている。

(委員)

- ・県の人材バンクとの二重登録は大丈夫か。

(委員)

- ・県の方は問題ないだろう。

(委員)

- ・人材リストについて、いつどこで始める予定なのか。

(事務局)

- ・今後、事務局でしっかり話を詰めながら、進めていきたい。

4 諸連絡

(事務局)

- ・今後も委員の皆様のお力添えをいただきながら、地域移行に向けた取組を進めていきたいと考えている。引き続き、ご理解とご協力をお願いしたい。

5 閉会